昼

哄笑に満ちた苦渋の花園に
むせかえるような甘美な香り漂い
もろい青春の熱情が沸き立ち騒ぐ

紗のかかった陽光(ひかり)の充満と淀んだ空気の中で
逃走という名の突進に自ら傷つき
紙切れのような薄っぺらな魂で立ち向かう

死への憧憬と恐怖を両手に握りしめ
歓喜と絶望の狭間を空しく駆け回り
自己への不信に顔をおおい、うずくまる

おお、壁に取り囲まれたぶざまな哀惜
迷妄に秩序を与えようとする空しい禁欲
快楽への激しい渇望と嫌悪に呻く

老いさらばえた者達の嫉妬も知らずに

(1984.11.28)